

# 日本現代医療の問題点

## —— ホスピスの必要性の検討を通して ——

M1365328 松 原 みゆき

### はじめに

本研究は、ホスピスの全体像、将来について論じ、それに基づいて日本医療の問題と今後のあり方を検討することを目的とする。現代医療は、16世紀以後の西洋近代医療の発展に基づき、病気の治療と患者の延命を主な目的にしている。しかしながら、現在可能なあらゆる治療技術をもってしても、治癒が望めない患者が数多くいることも事実である。一般の病院では必ずしも、終末期がん患者特有の苦痛を伴う症状に対する十分なケアがなされていないといった、多くの問題が提起されている。こうした問題に応えることを目的にして、ホスピスが日本で始まった。したがってホスピスの必要性、あるいはあり方を検討するならば、ここに日本の医療の問題点が明らかになってくる。ホスピスは単に終末期医療の施設というだけでなく、現在の医療に欠けている点を如実に示しているのである。ホスピスは死に場所でも、治療をあきらめた敗北の場でもない。期間の長短に係わらず「生を充実させる」「快適な日々を送る」「価値ある人生を生きる」ための場であり、医療はそのためにケアを提供するのである。

### I. ホスピスの定義と背景

本研究では、ホスピスとは、患者がその家族とともに、最後まで人間らしく、尊厳を持って生きることができるように行う医療サービスとその場所であると定義する。

日本のホスピス運動は、1973年柏木哲夫により、淀川キリスト教病院において始められた。そのホスピスが日本で必要とされた背景には、医療技術の進歩に伴う、治療優先の医療による人間不在の医療が行われていたことがあげられる。その後1981年には、聖霊三方原病院に旧厚生省の認可を受けた第1号ホスピスが誕生し、2003年1月1日現在、緩和ケア病棟は全国に拡がり、厚生労働省の承認を受けている施設は113施設、ベッド数は約2139床に増えている。

### II. ホスピスの実態—M ホスピスの調査から

まず先行研究から、ホスピスで実践していることについて内容分析を行い、1) 情報の共有、2) 疼痛などの症状緩和を含めた患者中心の医療、3) チームでの取り組み、4) 精神的支援、5) 社会と繋がる場、6) 家族ケア（遺族ケアを含む）、7) ホスピスの考え方を医療や社会の広い分野に応用する教育の7つの項目を挙げた。それを基に、実際にホスピスがどのように運営されているのかを知るために、M 病院ホスピス病棟

に合計2週間、研修という形で参加観察し、その後2日間、M 病院ホスピス病棟に勤務する看護師12名に「ホスピスと病棟の違いをどのように考えているのか」などの質問項目について半構成的にインタビューを行い、情報を得た。看護師の平均年齢33歳、ホスピスの平均経験年数3年である。その結果について内容分析を行い、ホスピスの実際と問題点を示す。

まず参加観察の結果から、事例A氏を通して7つの項目がどのように実践されているか記述する。

次いでインタビューを行い、その結果について、7つの項目に沿って分析を行った。ホスピスと一般病棟の違いについて問うたところ、一番多かった答えは、2) 疼痛などの症状緩和を含めた患者中心の医療として「痛みのコントロールをする」、「日常の生活を優先する」、4) 精神的支援としては「シスター・や神父の存在」3) チームでの取り組みは「チームで医療をする環境が整っている」、6) 家族ケア（遺族ケアを含む）「家族も一緒に看る」、「遺族会を開く」などである。

### III. 現代医療の問題点

参加観察とインタビューにおいては、ホスピスと一般病棟の「違い」に注目した。その中から、現代医療の問題点として、以下2点を挙げる。1) ホスピスの考え方を一般病棟に還すことができていないこと、2) 医療者中心にすすめられる医療、である。

1) については、現代ホスピスの創始者であるシリ・ソンダースをはじめ、インタビュー結果からも、現代医療とホスピスは、その目的が患者のQOLを高めることであるが、ホスピスの考え方方が、患者の身体面への援助だけに留まらず、患者及び家族の精神面への支援や社会との係わりなど、多方面にわたり、現代医療の中に広く還すことが望まれている。

2) については、患者中心の医療を進めたいと医療関係者は考えているが、実際の一般病院では、起床、食事、面会、清潔、睡眠、死の転帰をたどるまで、入院生活は治療や医療者が優先され進められている。

### おわりに

現代医療の問題が非常に大きいことがわかった。さらに今後の課題としては、現在医療に求められている経済性という側面と、他方ホスピスに代表される人間の生と死に関わり、QOLや価値と関係のある有用性（公共性）という側面の、二律背反ともいえる状況の中で、現代日本医療の方向性を考察する必要があると考える。